

## 論文の内容の要旨

森林科学 専攻

平成 23 年度博士課程入学

氏 名 徐 中芄

指導教員名 下村 彰男

論文題目 景観選好における評価因子の構造に関する研究

景観評価に関わる研究の本質的目的の一つは、景観という現象の内実を知ることである。人間が環境や景観に対して与える意味や価値を把握することは、人間と環境との間を結ぶ様々な糸の解明と繋がっている。本研究は其中で、景観評価において重要な研究課題である景観選好に着目する。

景観選好において、視覚的景観に対する共通した好みの存在はこれまでも示唆されている。こうした景観選好をめぐる研究が活発となる中で、選好に影響する「生物的及び文化的決定要因」の議論が展開され、環境-人間系を対象とした様々な関係性の解明が進められつつある。生物的決定要因論は、選好行為に影響するのは生物の本能であることを掲げ、生きるための指向性を強調している。一方、文化的決定要因論は、選好を左右するのは学習、経験、あるいは社会文化など後天的影響であることに着目している。

このような選好に関しての理論や、好まれる景観の具体的な特徴を解明する研究の中で、Kaplan&Kaplan（以後 Kaplans）による、「理解と探索」を基本とした「まとまり」、「複雑さ」、「わかりやすさ」、「ミステリー」の四因子からなる景観選好の規則性を説明する枠組みは、欧米においては広く参照され、評価因子としての

標準的位置付けを得つつある。しかしながら、評価因子の普遍性、あるいは先の生物的／文化的決定要因の議論を含む理論面との関係についての研究は未だ十分ではない。特に日本においては、個別の研究が散在する状況にあることから、その成果を体系的に整理し、評価因子やその構造的性に関する議論を行う場の共有が求められている。

本研究では、人間と環境との相互関係の中にあって、生物的及び文化的決定要因が景観選好に影響することを仮説的に考え、評価因子に関する普遍性及び共通性を解明し、これを生物的及び文化的決定要因と関連付けて体系的な理論として整理し、さらにその因子の構造的性を明らかにすることを目的とする。具体的には、(1) **Kaplans** による四つの評価因子の統合性と有効性を考察し、日本における研究の現状としての問題を提示した。(2) 日本の研究成果を俯瞰的に捉え、評価因子の構造的性を解明し、さらに選好に関連する欧米の理論（生物的及び文化的決定要因）と合わせて統合的な理論化を試みた。(3) 「百選・百景」を対象事例とし、因子構造の普遍性を確認し、その具体的な評価対象との関係を明らかにした。

序章では、以上の背景と目的を述べ、合わせて既往研究のレビューを踏まえながら、本研究の位置付けを示した。

第二章では、**Kaplans** の景観選好の因子概念について、環境心理学の分野におけるその位置づけと射程を把握するとともに、広汎な文献調査に基づいて評価因子の統合性と有効性を考察した。その上で、日本の研究現状を把握するために、海外の文献と比較することを通して問題の所在及び今後求められる研究の方向性を検討した。その結果、**Kaplans** の枠組みは、「まとまり」と「複雑さ」の二次元の評価因子を景観の視覚的構成要素として表し、また「わかりやすさ」と「ミステリー」の三次元の評価因子を景観の意味を含む概念として同時に扱うことによって、認知概念としての統合性を備えていることを考察した。またその統合性は、景観評価において視覚と意味を追求しつつ、景観計画設計などの実践へ適用されることで、有効射程を広げることに関結していることを論じた。さらに、**Kaplans** の枠組みは基本的に生物的決定要因に基づきつつ、文化的決定要因をも含んだ性格を持つものであることが考察された。

さらに、四つの評価因子に関して、「わかりやすさ」に関する研究の蓄積は少ないものの、「まとまり」、「ミステリー」、「複雑さ」は多くの研究で検証され、その有効性の高さが認められている傾向が示された。また、選好研究における評価因子に関する研究動向を概観し、評価因子の種類は **Kaplans** による枠組みの提示を契機に収斂する傾向にあることを明らかにした。**Kaplans** は自然性に対する幅広い選好結

果に着目し、自然景観の中にも選好の違いを生む何か決定的な要因が隠れていることを仮定して枠組みをまとめたのに対して、日本の既往研究では、自然性が選好に関する重要な評価因子として多く掲げられているものの、個々の結果を超えた相互の議論が進展しておらず、評価因子を統合し共有しようとする動きが乏しい現状が明らかとなり、今後の課題として考察された。

第三章では、日本の研究でよく用いられる様々な評価因子を体系的に整理することを目途とし、日本において公表された景観評価研究の結果群をデータとして使用し、評価因子の構造化を解明した。具体的には、評価研究における因子分析の結果に着目し、「美しい」、「親しみのある」、「好きな」、「自然な」、「魅力的」、「開放的」、「良い」、「広がりのある」など出現頻度の高い 21 個の評価因子を抽出し、グラフィカルモデリング分析を用いて「好む意識に与える要因」を各評価因子間の因果関係として明らかにした。その結果、「変化のある」、「親しみのある」と「落ち着きのある」、「魅力的」などの因果関係のメカニズムを、それぞれに「自然な」、「良い」、「美しい」と繋がる、景観の好みに影響を及ぼす構造として整理することができた。

さらに、この構造を選好性に関わる欧米の理論である生物的決定要因及び文化的決定要因との関係から考察した。両概念の内容を検討する上で、好まれる環境の特徴を記述するキーワードに着目し、生物的決定要因としては、生きるための本能に基づく選好結果に共通するキーワードが、「**wide, open**（広がりのある）」及び「**plentiful, rich**（多様な／変化のある）」であることを明らかにした。一方、文化的決定要因については二つの方向性を見出した。一つは「親しさ（**familiarity**）」と関連する成長環境や職場などの個人経験が、もう一つは「シンボルのある／象徴的な（**symbol**）」及び「歴史のある（**history**）」と関連する集団や社会から文化的影響を受ける様々な美の経験が、それぞれ景観選好に繋がる要因であることが考察された。これらのキーワードと、先の因子構造を比較し、類似点を明らかにした。さらに、生物的決定要因と文化的決定要因とは「発達性」の概念により関係付けられることを議論し、日本における評価構造と欧米の理論との統合を試みた。

第四章では、前章の結果である評価構造の成果を実態を通して確認した。各地で選定されている「百景・百選」を事例対象として、前章で得られた評価構造が一般社会で実際に選ばれている好まれる景観の実態と合致しているのかどうかについて確認した。さらに、評価構造の内容を把握することでその具体的な評価対象との関係を明らかにした。具体的には、書籍と新聞データベースから百景・百選を検索し、前

章における自然景観及び自然-人工景観の事例を参考しつつ、百景・百選の写真を選別し、内容記述から、「自然な」や「親しみのある」などの評価言語（形容詞や名詞など）、及び公園や農地などの評価対象を抽出した。

前章と同様の評価因子を用い、評価言語間の関係を数量化3類により分析した結果、「変化のある」と「自然な」、「親しみのある」と「落ち着きのある」、「魅力的」と「美しい」など、それぞれの布置関係の近さから、前章で導出した評価構造と概ね類似した傾向を確認することができた。このように、学術論文から理論的に導いた結果が実態としての選好反応結果により裏付けられたことにより、三章で示した景観選好の評価構造の普遍性が確認された。さらに、対応分析により評価対象と評価言語の関係を分析した結果、関連性が見られたのは、山や池と「変化のある」、住宅や路地と「落ち着きのある」、寺院や古民家と「魅力的」であった。このうち山や池と「変化のある」の布置は、他の対象・言語群から離れていることが認められた。この結果と発達性概念とを合わせて検討し、因子の具体的な構造と選好理論との関連性を考察した。

終章では、各章の結果を踏まえ、Kaplans の四因子と、本研究で得られた因子構造とを比較しながら総合的に考察した。また、生物的決定要因及び文化的決定要因の内容に基づいた発達性の概念を取り入れながら、三章、四章の結果について考察し、人間-環境系における様々な問題の解決に向けた計画論的視点から、本研究の統合的な理論の有用性を論じた。